

23. 臍シンチグラムに見られる空腸放射活性について

桜井 邦輝

(愛知がんセンター・放診)

臍シンチグラムに見られる空腸の放射活性の意義を調べるため、空腸放射活性がほとんど認められない49例と、空腸放射活性が肝左葉と同程度に見える26例について、調査した。

空腸放射活性がほとんど認められない症例の過半数の26例には、胆道癌、臍頭部癌による閉塞性黄疸があり、6例には総胆管結石があり、11例には肝炎または肝硬変があった。

空腸放射活性が、異常に高かった26例のうち、21例には臍炎があり、5例は臍体部癌、過酸性胃炎、胃潰瘍、腹膜炎の症例であった。

以上の結果から、臍シンチグラムに見られるいわゆる空腸放射活性の大部分は、胆汁中に排出された放射活性によるものであり、臍液の放射活性と空腸管の放射活性による部分は、極めて小さいと結論づけられる。

胆汁の産生、流出が著減する疾患では、空腸放射活性は減少し、臍炎等による空腸の局所的麻痺性イレウス状態により、胆汁が空腸内に貯溜すれば、空腸放射活性は増大する。

院。UCGにて左房腫瘍を疑われた。19 GI エラストー針にて右大腿静脈を穿刺し、三方活栓法にて RI アンギオ実施。 ^{99m}Tc -HSA 4 cc, 20 mCi 注入直後より 5 FPS にて 35 秒間連続撮影。RI アンギオ終了後、心プルスキャンを行った。両検査とも、左房腫瘍を描画しえた。また、心アンギオにても腫瘍を明瞭に描画できた。手術にて、左房の粘液腫と診断された。

原発性心臓腫瘍は稀な疾患とされ、剖検例では 0.002%~0.05% との報告がある。一方 RI 検査による心臓腫瘍の描画例は非常に少なく、1962 年 Isley らが右房の粘液腫を欠損像として初めて描画することに成功した。

左房に関しては、1971 年 Kriss らにより、左房の粘液腫例を初めて発表し、文献上それ以後 Zaret らの報告があるのみで、本邦での報告例はなく、われわれの症例は、世界で 3 例目、本邦では 1 例目と思われる。

RI アンギオおよび心プルスキャンは、従来心機能的診断及び心臓のう液貯溜の有無等の検査に用いられて来たが、心臓腫瘍が疑われる場合にも、他検査に比して被検者の負担が非常に軽い RI アンギオおよび心プルスキャンは、積極的に実施すべき検査法と思われる。

24. RI 検査にて描画しえた左房粘液腫の 1 例

大澤 保 矢野 正幸

菅野 敏彦 近藤 隆司

藤井 忠一 浜田 洋

広瀬 一年

(県西部浜松医療センター・放)

岡本 一也

(臨床検査科)

原発性心臓腫瘍は、稀な疾患とされているが、今回われわれは、心 RI アンギオおよび心プルスキャンにて、左房粘液腫を描画しえたので、症例を供覧し考察を加えて報告した。

症例は、45 歳男性。労作時呼吸困難を主訴に来

25. ^{201}Tl Cl による心筋シンチグラフィ

佐々木常雄 松原 一仁

三島 厚

(名大・放)

神戸 忠 安井 昭二

沢田 健 山崎 昇

(同・内)

使用した装置は LFOV シンチカメラであり、低エネルギー用高解像コリメーターを装着し、撮影は 40~50 万カウントで行い、2~3 分を要する。対象とした症例は心筋梗塞 19 例、原発性心筋症 2 例、心臓弁膜症 4 例、その他 5 例であり、合計 30 例である。心筋梗塞症例では全例に欠損